

いま、子どもたちは

手作り弁当について思うこと

増田 康子



「おべんとおべんと うれしいな……」

これは幼稚園に入つて最初に教わる「おべんと
うのうた」。

でも、私は、入園当初、その「おべんとう」の
時間が嫌で嫌でたまらなかつたのです。

皆でそろつて、決まつた時間に、それほどおな

かもすいていないのに、食事をしなければいけな

い。というのが嫌だったのかもしれない。と、今
になつて思うのですが、お昼が近づいてくると元

気がなくなつてきて、「おべんとおべんと……」
の歌の時は、机に突つ伏してメソメソしていた私
でした。

といっても、最後までずっとそうしているわけではなく、そのうち先生にほめられてやっとお弁当の包みを開けて、周りが食べ終わる頃になって食べ始め、結局きれいにたいらげる。ということをお繰り返していたように思います。

机に突つ伏して泣きながらも先生が気付いて肩に手を置いてくれるのを密かに待っていたような気がします。ただ先生の気を引きたかっただけかもしれません。

初めて、皆と一緒に弁当を食べ始めることができた日、先生が、「お母さんに見せてね」と、一通の手紙を持たせてくれました。

母は、その手紙を読んでもくれました。

「今日、初めて自分で弁当を出して、泣かずにお友達と一緒に食べることができました。ほめてあげてください」。

母に頭をなでてほめてもらいながら、先生の温

かさも感じていました。あの手紙がなかったら、次の日も机に突つ伏して泣いていたに違いありません。

幼稚園時のお弁当の思い出が詰まった、ブー・フリー・ウーのアルミのお弁当箱は、母が捨てずにとっておいてくれたので、今では私の「お宝」になっています。

大学を卒業してから、私は練馬の学童クラブの指導員になりました。

放課後から五時（現在は六時）までの間、留守家庭の児童と過ごす仕事なので給食のない土曜日や学校休業日は、子どもたちと一緒に弁当を食べるようになります。

「お弁当はできるだけ手作りしてください。」と、保護者の方にお願しているので指導員だけ「ホカ弁」を買ってきて食べるわけにはいきません。それでも時間がなかったり、奥さんが作って

くれないという男性の指導員は、空のお弁当箱とコンビニで買ってきたおにぎりを持ってきて、別になつてゐる手巻き用の「海苔」のフィルムを剥がして巻いて自分でにぎりなおし、お弁当箱に詰め込み、手作り弁当のように仕上げて子どもたちと一緒に食べたりと、陰でけっこう苦勞していることもあるのです。そこまでやるなら初めから自分でおにぎりくらい作ったほうが早いような気がします……。

子どもたちが机を囲んでお弁当を見せっこすることを、お母さん方は予想しているのかそのお弁当といつたらコンテストにでも出品しようかというような気合いの入れようです。

花模様ののり巻きや顔が描かれた御飯、デザートののりんごは兎さん。そんなお弁当を見ると、どうしても指導員も、「○○ちゃんのお弁当さきれい！」とか「△□君のお弁当おいしそう！」など

と言つてしまいます。

でも、ふと、横を見ると一目で昨晚の残り物だとわかるような、かたくなつたスバゲティを詰め込んでお弁当を黙々と食べている子がいたら……。やはり、きれいなお弁当をほめるのもほどほどにするべきかな。と思うのです。それと同時に、夏休みのように毎日のことだったら、そんなにお弁当に気合いを入れる必要はないとも思います。

どうも、お母さんたちの中には、「お弁当作りが楽しい」と思つている方はあまりいないようですし……。

というのは、夏休み、週に一日の割で「みんなでお昼ごはんを作る日」という取組みをやつた事があるのですが、その日になると急に出席が増えるのです。二百円か三百円の実費を貰うのですが、お母さん方は「安い！」と喜んで五回分も

いっぺんに出してくださったりします。そして連絡帳を見ると「お弁当作りから解放されて助かります」なんて書いてあるわけです。

保護者会のときに、

「感謝してもらっているのにこんなこと言ってますが、お母さんに楽をしてもらうためにお昼作りをしているわけじゃないんですよ。みんなで食べたいものを考えて、役割を決めて、買い物に行ったり材料を洗ったり切ったり。そして楽しく会食して片付けまでがんばる。クラブとしては、そんな大きな意味のある取組みなんです」と話したことがあるのですが、

「うん、それはわかる。でも助かるというのがホネネ」

とお母さん方は苦笑しながら、うなずいていました。でも、お昼作りを主役の子どもたちが喜んでいたことは確かでした。

保護者会で言い忘れた事を「クラブだより」に書きました。

「お母さんが作ったお弁当を喜んで食べてくれる人（子）がいるってとても幸せな事だと思うのですが……。」

お弁当作りなんて大嫌い！ というお母さんには、せめて子どもの前では楽しそうに作ってほしいと思います。

もうひとつ提案したいこと、三度の食事の中でお昼をもっと大切に考えてもよいのではないかと
いうことです。

日本人は、夕食を一番重くとする習慣になっ
てきているようですが、これは健康面からはあまり良いことではなく、昼食を



充実させるべき、ということとはよく言われています。前の日の残り物をお弁当にするだけではなく、お弁当を考えながら買物をして残り物を夕食に回すという発想があっても良いのではないかと思います。

練馬区主催のお祭のひとつに「練馬こどもまつり」というのがあります。私も区の職員として毎年関わっています。

その祭の従事者には、職員にもボランティアにも、区からお弁当が支給されるのですが、子どもの実行委員にも支給しても良いかどうかで、スタモנדタしたことがあります。子どもにも支給するべきだと主張する方の意見は、

「子どもだって大人と同じように仕事をしているのだから差別するのは良くない」というものでした。「子どもの働きも大人と同じように認めてほ

しい」というものだったと思います。

それはそれでわかるのですが、そこでちょっとひっかかったことは、「子どもがお弁当屋さんの作った大人と同じお弁当なんて喜ぶのだろうか」ということでした。子どもが、おそろいのお弁当とお母さんの手作り弁当のどちらを喜ぶか、そんなことははっきりしすぎています。

子どもにとつてお弁当は、働きへの報酬ではなくてもっと単純に、「楽しみ」です。友達とおかずのとりかえっこをしたり、お弁当を作ってくれた人を思い出してその日の朝の家の様子をおしゃべりしたり。

作る人は確かに大変かも知れないけれど、楽しいお祭のためのお弁当なら、楽しんで作ってほしいものです。

こどもまつりのお弁当については、大人にも支給の必要はないと、私は思っています。



たかが「お弁当」の話ですが、お弁当を作る人と食べる人の間に通っているものを考えると、侮れないようです。

食べ物にまつわる思い出は、何時までも残るもので私の幼稚園の思い出にしても、お弁当から始まっているわけです。それを皮切りに運動会、遠足……と次々と思い出が開けてきます。

大人になったときに幼児期の良い思い出をたくさん持つための一つの要素として「手作り弁当」は、決して大袈裟ではないと思います。

(練馬区立土支田児童館)